

9 月第 3 週の礼拝説教

- 日 時：2024 年 9 月 15 日（日）10：30～11：30 聖霊降臨節第 18 主日礼拝
- 説 教： 保科けい子牧師
- 聖 書：新約：ヨハネによる福音書 10 章 22～30 節（P187）
- 説教題：「 声を聞き分ける 」
- 讃美歌：1（主イエスよ、われらに）
436（十字架の血に 救いあれば）

今年度は、スタートの 4 月の 7 日（日）から、ヨハネによる福音書を日本基督教団の聖書日課に従って取り上げております。その時に申し上げ、その後にも何度か繰り返してきてきたと思いますが、ヨハネによる福音書の 20 章 31 節には、ヨハネによる福音書の書かれた目的が記されています。それは「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」ということです。つまり、あなたがたと呼びかけられているこの福音書の読者、その中には、2000 年の時を経てヨハネによる福音書に出会っている私たちも当然含まれているわけですが、その私たちが「イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるため」に書かれたと記されているのです。それは、ヨハネによる福音書に記されているどのようなことも、究極的にはその目的に向かって語られているということになりましょう。

ところで、先週は 10 章の 1 節から 6 節で『羊の囲い』のたとえを取り上げました。そこでは、主なる神様がお持ちになっている羊の囲いの中へ、羊を狙って門を通らないでほかの所から乗り越えて入ってくる盗人や強盗がいることが指摘されていました。ただし、そこでは、盗人や強盗にたとえられているのは誰かということは語られていませんでした。しかし、ヨハネによる福音書を最初から続けて読んで見ると、ファリサイ派のユダヤ人たちがそのような存在であったことが分かります。旧約聖書のエレミヤ書 23 章 1 節以下には、主なる神様が民の羊飼いとして遣わしたはずの指導者たちが盗人になってしまった、ということが記されています。彼らは民を養い導き守る羊飼いだと思われていたのに、盗人になってしまったのです。あるいは羊飼いととしての務めを与えられていたのに、自分のことばかり考えて羊の世話をせず、いざという時には羊を置いて逃げ去ってしまう雇い人にたとえられています。そして、ヨハネによる福音書は、紀元 1 世紀の終わり頃に、ファリサイ派を中心とするユダヤ人たちによってキリスト教会が迫害されていたことを背景に書かれています。当時、イエスは救い主メシアであるという信仰を言い表すとユダヤ人たちの共同体から追放される、という迫害が起っていたのです。そのような背景があるなかで、ヨハネによる福音書は、迫害の下にある信仰者たちを力づけ、励ますために書かれています。

この時代の人々にとって、イエスはメシア、つまり救い主なのかどうか大きな問題でした。「イエスこそメシアであり、神の独り子でありながら人間となって私たちの罪を背負って十字架にかかって死んで下さり、父なる神によって復活した方である。この主イエスによってこそ、罪の赦しと永遠の命が、つまり神による救いが与えられる。」と

というのが、キリスト教会の信仰でした。けれども、そのような信仰を公に告白して教会に連なることは、ユダヤ人の社会から村八分にされることでもありました。「イエスこそメシアだとキリスト教会は教えているが、律法の教師であるファリサイ派の人々は、イエスは罪人だと言っている。」、どちらを信じればよいのか、その間で人々は揺れ動いていたのです。日常生活での付き合いもあるわけですから、人々は迷いを覚え動揺している人々も多かったと思います。本日の箇所 24 節に、ユダヤ人たちがイエスを取り囲んで「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい」と言ったとありますが、それはこのヨハネによる福音書が書かれた当時、多くのユダヤ人たちが抱いていた思いであり疑問だったのです。ユダヤ人たちが主イエスにこのように問いかけたのは、エルサレムで神殿奉献記念祭が行なわれていた時だった、と 22 節にあります。神殿奉献記念祭というのは、エルサレムが異教徒によって支配され神殿にギリシアの神ゼウスの像が置かれて汚されていた時に、そのエルサレムをユダヤ人たちが取り戻し、荒れ果てた神殿を清めてもう一度主なる神に奉献した、という紀元前 164 年の出来事を記念して行なわれていた祭です。それは「冬であった」と 22 節にあります。7 章で描かれていた仮庵祭は秋の収穫の祭りでした。その最終日に、主イエスはヨハネによる福音書 7 章 37 節、38 節で「・・・渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。38 わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」と大声で言われたのです。その時から本日の箇所へは、季節が明らかに移っていることが分かります。そして、ヨハネによる福音書は、当時のイスラエルで大切にされていたお祭りの時に、主イエスが非常に重要なメッセージを語られていることを記しているのです。先のことになりますが、次のお祭りは「過越祭」になります。

さて、主イエスはユダヤ人たちの「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい。」という 10 章 24 節に記されている問いに対して、25 節で「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行なう業が、わたしについて証しをしている。」とお答えになりました。「自分がメシアならはっきり言ってほしい」という人々に対して、主イエスは「私は既にそのことをはっきり言っている。私の行なっている業、つまり病人の癒しなどの奇跡が、そのことをはっきりと証ししている」と語られたのです。今回は取り上げておりませんが、9 章では生まれつきの盲人を癒された出来事が記されています。そして、目を開いていただいて目が見えるようになった人は、ファリサイ派の人々やユダヤ人たちの詰問に対して、9 章 33 節で「あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかったはずです。」とはっきりと答えています。主イエスこそメシアであり救い主であることは、そこにおいてもはっきりと証しされているのです。「しかし、あなたたちは信じない」と 26 節にあります。つまり、主イエスがはっきり言っていないのではなくて、はっきり語られているのに信じようとしないあなたがたに問題があるのだ、と主イエスは指摘されているのです。その理由として、26 節の後半には「わたしの羊ではないからである。」とあります。主イエスがメシア、救い主であることは既に語られていますし、主イエスのなされたみ業によっても示されています。ですから、あの癒された盲人のように、信仰の目を開かれて主イエスを信じた人もいたのです。しかし、ファリサイ派のユダヤ人たちのように、自分たちは見えていると言い張っていながら重要なことが見えなくなっていて、頑なに主イエスを救い主と信じようとしない人たちもいたのです。ヨ

ハネによる福音書は、そのような人たちは元々主イエスの羊ではないのだ、と厳しく突き放して語っているのです。

そして、27 節で主イエスは「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う」とはっきりと語られました。主イエスの羊である者は羊飼いである主イエスの声を聞き分け、主イエスに従っていくはずなのです。このことは、ヨハネによる福音書の中でも有名な御言葉としてよく知られている 10 章 14 節の「わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている」と深く関わりがあります。主イエスという良い羊飼いの声をよく知っているがゆえに、他の者の声と聞き分けることができ、主イエスの声にのみ従っていく、それが主イエスの飼っておられる羊です。主イエスの羊でない者は、その声を聞いても羊飼いの声と聞き分けることができないので、信じようとせず従っていかうとしないのです。そこで、では私たちは果たして主イエスの羊なのだろうか、という問いが生まれてきます。主イエスは私たちに、「頑張らなくて私の羊となりなさい。」と勧めておられるのではありません。羊の囲いのたとえにあったように、羊は元々羊の囲いにおり、羊飼いに慣れているので声を聞き分けるのです。そして「わたしは彼らを知っており」とあるように、主イエスのご自分の羊である私たち一人ひとりをはっきりと知っておられるというのです。だからこそ、「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。」とはっきりと断言なさるのです。これらのことは、「もしメシアなら、はっきりそう言いなさい。」という詰問に対して主イエスがお答えになった言葉です。つまり、主イエスがメシア（救い主）であることは、主イエスの羊でなければ分からない、と言っておられるのです。羊は生まれた時から自分の羊飼いの声を聞いて育ち、自分の飼い主の声を他の人の声と聞き分けることができるように育つのです。そのようにして育まれていることを、私たちはなかなか自覚することができません。けれども、私たちの目を開き耳を開いてくださる方の声を、私たちが必ず聞くことができるように、と信じて祈り続けることはできるのです。それが、今日、私たちがヨハネによる福音書から聞く喜びの福音の一つなのです。